

称号及び氏名 博士（経済学）石森 良孝

学位授与の日付 令和6年3月31日

論文名 新渡戸稲造の経済思想―「中間的原理」としての経済学―

論文審査委員 主査 近藤 真司  
副査 上村 隆広  
副査 岡田 光代  
副査 西岡 幹雄

## 論文要旨

新渡戸稲造は『武士道』の著者や国連事務次長としての業績が一般的に知られているが、東京大学経済学部植民地講座（国際経済学講座）の初代教授でありアメリカではイリーやドイツではシュモラーなど歴史学派の指導を受け、ドイツで博士号を取得している。また、新渡戸は東京大学に現存するアダム・スミスの蔵書（アダム・スミス文庫）の一部のロンドンでの購入者でもある。

本論文は経済学者としての新渡戸を彼の著書である『農業本論』、「糖業改良意見書」、『植民政策講義及論文集』から明らかにするものである。本論文では近代化が進む日本における社会問題を「中間的原理」という考え方をもとにして、新渡戸が経済学を用いて取り扱おうとしていたことを論じている。新渡戸の考える「中間的原理」とは学問における理論と現実、「貨幣で計測できる価値」と「貨幣で計測できない価値」の関係など彼の経済思想を理解するための重要な概念であるというのが著者の主張である。『農業本論』が出版された当時（1898年）の河上肇や徳富蘇峰の書評を紹介し、さらに新渡戸の先行研究を検討し自らの考えを論じている。新渡戸は1901年に植民地経営者として台湾総督府民政部殖産課長に就任し、「糖業改良意見書」を台湾総督府へ提出する。新渡戸の台湾植民地の経済的自立や民族的・政治的な考えは、彼がスミスの『国富論』からも影響を受けているというのが本論文の主張でもある。

本論文の貢献としては、経済学者新渡戸稲造を彼の「中間的原理」という概念をもとに明らかにした点であり、新渡戸研究において新たな局面を提供するものである。本論文は以下の章から構成されている。

はじめに

第1章 新渡戸稲造の経歴

第2章 『農業本論』における農業と農学の関係

第3章 新渡戸稲造の経済学

第4章 農業と風俗人情—産業構造の変化に伴う価値観の変化—

第5章 「糖業改良意見書」にみる新渡戸稲造の台湾糖業政策

第6章 新渡戸稲造の植民政策とアダム・スミスの『国富論』

第7章 結語

はじめにでは、研究のテーマ設定の理由と問題意識を明らかにした上で、新渡戸稲造が著した『農業本論』、「糖業改良意見書」、「植民政策講義」に関する先行研究を検討している。第1章は、新渡戸稲造の経歴をまとめている。第2章は、新渡戸が経済学を「中間的原理」として成立させる過程を『農業本論』を検討することによって明らかにしている。第3章は、『農業本論』における経済学に関する叙述から、彼が「貨幣で計測できる価値」と「貨幣で計測できない価値」を共存させることを望んでいることを明かにしている。第4章では、近代化に伴って価値観が変化していく中で、新渡戸は「中間的原理」という概念を用いて、農家の生活を保障しつつ、新旧の価値観を共存させる試みを明らかにした。第5章では、新渡戸が、台湾糖業政策において自身の『『中間的原理』としての経済学』を実践しようとしたことを論じた。第6章は、新渡戸の植民政策をアダム・スミスの『国富論』との関係から検討した。むすびである第7章は経済学を「中間的原理」として規定し、実践学問として取り扱った経済学者が新渡戸稲造であるとまとめている。

## 審査結果の要旨

審査においては（1）適切な研究テーマが設定されており研究テーマが明確であること（2）研究目的に合致した適切な方法・手法によって分析されていること（3）研究内容に学術的な独創性と新規性が認められること（4）論文の構成が整合的で、且つ、論旨の展開が論理的であることの4点から行った。

本論文には、日本経済思想史学会で報告し同学会誌に投稿した『農業本論』にみる経済学者としての新渡戸稲造（『日本経済思想史研究』2022年3月）、と『経済学研究』に投稿予定である「新渡戸稲造の台湾糖業政策」の内容も含まれる。また、日本経済思想史学会並びに経済学史学会において討論者を依頼されるなど学会においても評価されている。

経済学者としての新渡戸稲造の研究は今後広がり期待される研究分野であり、本論文はその端緒をなしたものとして評価できる。本審査委員会は、博士の学位を授与することを適当と認める。